

足軽（歩兵）

足軽（字義通りには「軽い足」）は封建時代の日本の侍階級によって雇われた歩兵でした。いくつかの藩では、足軽は侍階級の一員とは見なされない場合もありましたが、加賀藩（金沢を中心とする封建時代の石川）では最下層とはいえ、足軽は侍として認識されていました。加賀藩は、特に足軽に魅力的であったと考えられます。経済的な機会があったことに加え、他の藩とは異なり、庭が付いた一戸建ての家が割り当てられていたからです。もっとも、加賀藩でも足軽は依然として低い地位であり、その生活は厳しいものでした。封建時代の日本では、社会的地位によって、給料、住居、雇用、着てよい衣服や持っていた武器が定められていました。最下位の足軽は、より上の階級に強く服従させられており、しばしば貧困と戦っていました。

歴史：

足軽という言葉自体は、鎌倉時代（1185—1333）にはすでにありました。そして、1467～1600年ごろの戦国時代・桃山時代に広く使われるようになりました。

公的な常備軍が存在する前に、日本の領主はしばしば領地で働いている者たちを武装させ、戦に動員しました。こうした領主たちが侍階級の始まりであり、彼らの農民たちは軍隊の屋台骨を構成する歩兵でした。この武装した農民たちが足軽の起源だと考えられています。しかし戦国時代に入ると、絶え間なく続く戦に、これらの農民軍だけでは不十分だった。そのため、領主は時に、流浪の歩兵に頼りました。このような形で、足軽の数は増えていきました。

初期の足軽は弓矢や槍を持つグループを構成していましたが、訓練されておらず、手に負えない人々であると考えられていました。彼らは通常、ゲリラ戦に動員されました。その後、銃器が日本に導入された16世紀に、大名が彼らを用いて鉄砲隊をつくりました。これにより、足軽の評価は大幅に変わりました。彼らは軍の屋台骨であり、侍たちを補完する存在だとみなされたのです。このとき、多くの農民が、社会的地位を高めるために足軽になりました。

しかし、より平和な江戸時代（1603—1867）に入ると、侍階級のリストウによって、足軽の数は大幅に減少しました。残った足軽たちに与えられたのは、以前よりも消極的な役割でした。多くの足軽は、

上級武士のサポートをしながら、戦闘準備もするという二重の負担を負わなければなりませんでした。それにもかかわらず、彼らには高度な教育や専門的な訓練を受ける機会がありました。

生活：

足輕の生活は厳しかったようです。彼らはしばしば上司に呼び出され、彼らの言いなりになりましたが、彼らの扶持は低いままでした。加賀藩の典型的な足輕の場合、年間の扶持の半分以上は、当時の主食である米を購入するために費やされたため、収入を補うために、非番時は多くの足輕が内職をしていました。

衣類：

足輕は公務では「はかま」を着用する必要がありました。彼らの場合、この衣装は、ズボンのひだが、ひざ下まではあっても、足上までにはかからないものでした。より長い「はかま」は、足輕の 1 ランク上の「御徒」より上の者にしか許されていませんでした。足輕は、日々、素早く動いたり、さまざまな動き方を必要としたりする業務に従事していたため、はかまを高くまくり上げ、太ももが現れた状態になっていたのは珍しいことではありませんでした。冬の半ばでさえ、足輕はしばしば脚を露出させていたのです。